

万人起業家社会と国家

塩沢由典(2013.7.24.)

私が考えていることを、小野先生が言われてきたことに即して、すこしお話ししてみたいと思います。

「万人企業家社会」。これは小野先生の考える理想の社会像です。これはいったいどういうものか。目指している方向はなにか。どういう社会をつくりたいのか。そういう話をするとき、よく使われるいくつかのキーワードがあります。個体的所有という場合もあります。小野先生は、「個人的所有」という言葉を使っています。それから、諸個人の自由な連合と、アソシエーション。これらは後で田畑先生がお話をされるかもしれませんが、これらはすべてマルクスに原典がある言葉です。そういう意味では、小野さんはやはりずっとマルクスをベースに置いて考えてこられたということでしょう。

理想の社会を目指すために何が必要か。この点で、小野さんが提案しているのが、「組織を否定する」ということです。

組織を否定するというのは、どこまで、どういう形でできるかって、いろいろあると思います。法制的に言うと、まずあらゆる法人を否定する。これはかなりラジカルですよね。どういう社会ができるかと、ちょっとなかなか想像がつかない。万人企業家社会の中にはいくつかテーマがありまして、一つは企業家、これは「業を企てる」と書くこともあります。小野さんは「業を起こす」起業家を考えています。あらゆる人が新しい事業体を起こして、個人事業をやる社会を考えています。

それが小野さんの考える理想の社会です。そのときに、そもそも原資はどうするのか。これはハンガリーの経済学者のリシュカという人のアイデアを取って、出生時に社会が各人に平等にお金を配分する。資産を配分するということを考えていられます。

その裏側として、死亡したときには、全財産を社会に返上すると言ってもいいし、社会が没収すると言ってもいいんですけど、財産の相続は認めない。そういう社会を考える。これによって、あらゆる人は自分が会社を起こす。「会社」と言っではほんとうはいけません。法人は認めないので。つい「会社」といった言葉を使いますが、ほんとうは事業を起こす、仕事を興すというべきでしょうか。みな事業を始める。それに必要な原資は平等にある。そういう状態から出発することを考えます。

小野さんは個人起業家の連合体ということを考えています。この典型的なイメージとして、演劇・ミュージカル型集団という言葉がキーワードとして出てきます。先ほど、奥さまの紹介の中に、青年時代、演劇青年だったという話がありました。それを聞いて「ああ、そうか。彼の原点は演劇の世界だったのか」と納得できました。演劇は、文学座みたいな巨大組織としてやっているところもありますけれども、ふつうはプロジェクト主義ですね。今度はこういう芝居をやりたいというときに、プロデューサーが出てきて、演出家を決め、その人たちが今度は配役、俳優を決めていく。それから、裏方も全部決めていく。ひとつの芝居ごとに離合集散を繰り返しながら、しかし大きな仕事をやっていく。それをイメージして、こういうことがあらゆる場面で行われるような社会をつくらうではないかというのが小野先生の提案かと思います。

そのとき、国家はどうなるのか。このことは、小野さんの文章の中には、あまりはっきり出てきません。国家というのは巨大な組織ですから、たぶん、全否定されるんでしょう。しかし、全否定しまつと、困ることもある。例えば、先ほどの生活建設・維持ファンド、これを誰が管理して、平等に配分し、または遺産を取り上げるのか。やっぱり国家なのかなと、私はまず思ってしまうんですけども、小野さんはそうは考えません。小野さんは「一つの委員会」という言葉をよく使われます。銀行の役割も、今のような法人組織として考えるのではなくて、一つの委員会として考える。生活建設・維持ファンドを管理するのは、こうした委員会としての銀行のようなものを考えればよい。小野さんはこう言います。

そのとき、一番重要になるのは、国家に代わって、市場です。小野さんはイチバと言うかもしれませんが。国家とか計画経済を考えると、どうしても自由な社会はできないと。そういうことを考えると、市場を認めざるを得ない。これはユーゴスラビアの社会主義が目指したことです。しかし、小野さんは、それもちょっと問題ではないかということを言われています。

そこで、この小野さんの夢、目指した理想社会というものが、うまく機能するかどうかということを考えてみました。スタニスラフ・アンドレスキーという社会学者がいます。日本語では『社会科学の神話』という本があります。これは、1983年に日経新聞から出たんですが、日経新聞は、新聞社ですからすぐに絶版してしまいます。もちろん今は図書館か中古で買うしかありません。

もとの表題は「呪術としての社会科学」というものです。その中で、アンドレスキーは、社会に関する認識というものは、社会学が理論的研究とか、調査とかいろいろなことをやって深まったというよりは、むしろ社会に関する改造主義者たちの夢と、いやそんなことをやったら、大変なことになってしまうという保守主義者との熾烈な討論の中から生まれてきたと言っています。例としては、マルクスとウェーバーが上げられています。マルクスが立てた理想社会に対してウェーバーは別のものを持ってきた。ほかにもいろいろ例を挙げますが、こういうことを言っています

小野さんのこの万人企業家社会というのは、やはり現在から見ると、どうしても理想の話です。小野さんは、新しい社会を構想する人です。アンドレスキーのいう社会に関する改造主義者です。それに比べますと、私はどうしても「うまくいくかな」と疑ってしまふ保守主義者のようです。

私もある程度ラジカルだとは思っているんですけども、やっぱり「そううまくいくかな」というほうが先に来るわけですね。そこであえてアンドレスキーの枠組みに乗ってみようと思います。改造主義者と保守主義者の討論によって見えてくるものがあるかも知れません。

まず考えなければならないのは、社会主義、共産主義の反省です。小野さんが組織を全面否定するのも、その経験があるからでしょう。これは個人的に体

験したことではないかも知れませんが、人類にとっては大変な大きな経験でした。20世紀の最大の実験と言っているかも知れません。

それがうまくいかなかった。計画経済だったから、うまくいかなかったということが背後にあるかと思います。今日、お配りいただいた、小野さんのお仕事の中の書評の一番最初にあるのがセルツキーの本です。この本は、小野さんは、35歳で修士1年生になったとき、杉原四郎先生に自分から提案して1対1で検討したそうです。そのセルツキーが言っているのは、こういうことです。

計画というのは巨大な国家がなければ成り立たない。中央計画当局というのがあって、社会のあらゆるところにネットワークを張っていないといけない。しかも、その計画というのは、誰か委員会がつくって、上から下に、トップダウン方式で指令していく以外に成り立たない。

そうすると、その計画自身、いかに効率的であろうと、社会の構造は、非常に権威主義的なものになってしまう。自由のないものになってしまう。それがソ連の70年間の歴史になったという。これはまだソ連がまだつぶれる前から、そう言っているんです。小野さんはそこを一步進んで、組織・法人、あらゆるものを否定しました。そういうものじゃなくて、我々が生きていくような、生きていけるような、また自由闊達に交流できるような社会をつくりたい。こういうことを考えていられたわけです。

法人の否定ということでは、小野さんは共同組合まで否定されてしまいます。モンドラゴンとったかなりうまく行っている例もあるのですが、小野さんは「共同組合においては、一人一票原則が閉鎖的悪平等に転化してしまう」。こういうことを言われています。

これは社会・経済システム学会の学会誌の12号に載った文章のいちぶです。先ほど紹介の中に社会経済システム学会で活躍されていたというお話がありました。配布資料のほうには、1号分しか載ってませんが、『社会・経済システム』には、確か4本かそれくらい載っています。

こういう形の社会、つまり生まれたときに社会から平等に原資を配分してもらう社会、これは、物質的には非常に平等な社会なのかも知れません。ただも

うちょっと詳しく考えると、本当にこれは平等社会か、ということはいえると思うんです。なぜかというと、人間が家庭の中で育ってくる以上は、子どものときに親が教える資産というのは大変なものです。ちょっと表現は難しいのですが、たとえば、親が飲んだくれで、子どものことを構わないとすると、子どもが受け継ぐ文化的・知的資産は乏しいものになりかねません。社会からお金もらえるんだったら、自分は働かなくてもいいよというところに育ちますと、もちろん中には、それを反面教師として頑張る人もいますけれども、起業家なんかになって苦労しようという人はなかなか出てこないかもしれません。

物的に平等になればなるほど、この社会では、親の生活態度とか、気風とか、そういったものが大切になります。ブルデューは、これを「文化資本」と言っています。文化資本までも平等化することは極めて難しい。もちろん、万人企業家社会というのは、平等だけを目指したものじゃなくて、自由・平等・友愛、この三つを同時に実現したいということなんですけれども、平等ということひとつ取っても、なかなか難しいことがあります。

もう一つの問題は、起業家に向かない人はどうしたらいいのかということです。病気の人とか、ハンディのある人の問題もあります。元気で「私は経営者になりたくない」という人は結構いる。私も大学の管理職を4年ぐらいいやりましたけれども、もうこりこりです。それよりは、事務的な仕事はみんなほかの人にやってもらって、自分の勝手な研究をやって、論文書いているのがずっといい。

小野さんは、それも否定はしないのでしょうか。お互いの契約で、事務仕事が好きな人と、研究が好きな人と、お互いに契約でいろいろやればいいのかもかもしれません。けれども、それはどんどん組織的なものになっていってしまうのではないか。法人は認めないとしても、自然の勢いではそうになってしまうのではないか。こういう問題があります。

私はベーシックインカムという考え方は、あんまり賛成ではありません。しかし、こういう点からいうと、ベーシックインカムのほうがやりやすい。未来がどうかということとは別に、やりやすいかなと感じます。

個人企業家の連合体というものですべてをうまくやطيعことができるのか。個人事務所とか、工房、デザイナーの事務所とか、そういうイメージで、どこまでうまくやطيعいくことができるのか。分かりやすい例だったら、スタジオ・ジブリでしょう。あそこは、100人ぐらい働いている人はいるんですけど、工房方式ですよ。でも、例えば、連合体が大学になったらどうでしょう。大学は、中世ヨーロッパにできたときには、学生の組合、教員の組合だったので、初期はそうだったのかもしれませんが。しかし、いまの巨大組織である大学を工房方式に分解して、うまくいくだろうか。それから、鉄道とか、電力とか、ネットワークと安定性を要求されるもの、そういう仕事を個人企業家の連合体でやるというのはなかなか難しいのではないのでしょうか。

安心とか、安全の規格をどうするか、という問題もあります。食品などでも、市場（イチバ）で交換するものに毒が入っていたらどうするか。それは監視しましょうということになるでしょうが、どうやってそれを実現するか。この問題は昔から市場（イチバ）でもありました。しかし、それを担うのは、少なくとも今までは国家でした。国家の保護のない華僑ネットワークとか、ユダヤ商人のネットワークとか、国家ではない規制もありましたが、しだいにそれらも国家に吸収されていった。

さらに言えば、社会のいろんな資産を使って、新しく事業を興すときに、どの資産を使えるかということと、それは競争入札によるということです。彼が勤めていた会社(シンクタンク)の受注は、ほとんど競争入札ですから、そういうことが、イメージにあったのでしょう。かなりうまくいく場面もあると思います。しかし、根拠のない高額入札をする人が出てきちゃった場合にどうするのかとか、逸脱に対する罰則が要るとか、いろんなことがありますね。制度設計が非常に難しくなります。たとえば、借用した資産は、2年後には必ず返さなきゃいけない、などと決めてしまうと、社会の資産を乱用するというようなことがあると思います。

では、どう考えたらよいか。

まず、社会全体を一挙に変えることができるのかどうか。これは、少し昔の

表現で言えば、革命が可能かどうかということかもしれません。もし可能としても、そういう社会変化を取るべきかどうか。それも考えなければいけません。

小野さんは、『社会経済システム』の12号に「以上の展望への移行が、平和的に実現するかいなかは、一概には断定できない」。ひょっとしたら、戦争状態を通っても、先に行かなきゃいけないということ、一行だけ示唆されているところがあります。しかし、私はそういうようにでき上がった社会というのが、本当に万人企業家社会として、また個人企業家の自由な連合体として、うまくいくだろうかと疑問に思います。

私自身の考えにも、現在、小野さんがいろいろ考えていたような、企業家社会に近いものが部分的には生まれてきています。そういう意味では、小野さんと私とで大きな違いはない。ただ、そう方向をどうやって実現していくのか。社会の合意のあるなかで、すこしずつ増やしていく以外に、仕方がないんじゃないか。私はこう思います。まあ、小野さんも、現実的はそれしか道はないと考えていのかもかもしれません。

いまは大きな変化の時代です。組織から情報へ、組織から知識へと価値を生み出すものの重心が移りつつあります。企業をめぐるでも、いろいろな変化があります。企業内起業家だとか、起業を渡り歩くシンボリック・アナリストだとか、マネージメント・バイアウト(MBO)とか。マネージメント・バイアウトというのは、会社の中にいる人たちが自分の会社を買い取って、独立するという方式です。これは結構あるんですよ、最近。日本ではまだ目立ちませんが、アメリカの大学生、ハーバードとかMITのような大学の卒業生たちが、大企業に就職するより、むしろベンチャー起業家になることを目指している。こういう社会の雰囲気の違いもある。

日本は、変化の方向では、なかなかそういうものが見出しにくい。しかし、長期の経済停滞で企業に対する忠誠心が弱まっている。そういう指摘はあります。小野さんも、こうした「日本経済の深部における基層的な変質」というものに注目したらどうかということをおっしゃられます。

もう一つが、ムハマド・ユヌスが始めて、いろいろな国に広がっているグラ

ミン銀行です。小野さんはこれにすごく早くから注目していた。ユヌスはノーベル平和賞をもらったので、皆さん、よくご存じかと思います。小口の預金を集めて小口の起業資金として貸す。最初にユヌスさんが貸したのは、たった 300 ドルといわれています。300 ドル貸してあげることによって、バングラディッシュだったら、新しい事業ができる。ニワトリを買ってきて卵を市場で売るといった事業です。ユヌスさんのグラミン銀行では基本的に女性にしか貸さない。女性が 5 人組を作って、共同の責任で返済もするし、事業も援助する。だから不払い事故がきわめて少ない。それで低利・小口でも回転するし拡大もした。

グラミン銀行の大変な成功をみて、あらゆる人がびっくりした。それでバングラディッシュを超えて、いろいろな国でに広まった。いまは、マイクロファイナンスという一般名で呼ばれています。

万人企業家社会の理想は私も素晴らしいものだと思います。でもそれを、組織の否定という形では実現はできないのではないかと。やっぱりさまざまな成功例をつくっていくということから始める以外にはないのではないかと考えております。

「いま、われわれが考えなければならないこと」と書いていますけど、そこは省かせていただいて、内部観察と経済について、一言だけ。

司会：申し訳ないです。はい、もう 10 分過ぎています。後のほうは簡単に。よろしくお願いします。

塩沢：すみません。小野さん、内部観測的にということをよく言われる。これは松野孝一郎先生などが言い出されて、今日の郡司ペギオ幸夫先生にのお話にもあった見方です。わたしはその考え方・捉え方自体を否定するということではないのです。それが経済を考えるときの導きの糸としてあってもよい。ただ、問題は、小野先生が「内部観察でなきゃ分からない」という形で話をされることについては、すこし違和感を持っています。小野さんの言わんとしているこ

とは、経済学でいえば、たとえば、市場経済を動かしているものは証券取引所のような組織された市場ではなく、^{相対取引}相対取引のネットワークなんだ、といった主張でしょう。それは経済の主流派、新古典派のその批判としては正しいと思います。ただ、そのあたりは経済学の内部の人間が分かるようなことばで語りかけなければ理解されないのではないかと思います。

最後になりますが、小野さんの『唯物論研究』の連載。2章までで止まってしまった。構想では13章までですよ。小野さんの大きな構想は、やはり全体像があつての部分部分ですから、具体的に展開してもらふ機会が失われてしまったことは、なんとしても残念なことです。小野さんの考えを種に、いろいろ考えていくことが残されたものについての課題だろうと思います。